

200点超を集める

東京で久々の大回顧展

没後
40年

熊谷守一

生きるよろこび

クラシック
メモリアリ

東京国立近代美術館

2017年12月1日(金)〜2018年3月21日(水・祝)



スケッチや日記などの資料も紹介。
画家の創作の秘密に迫ります。

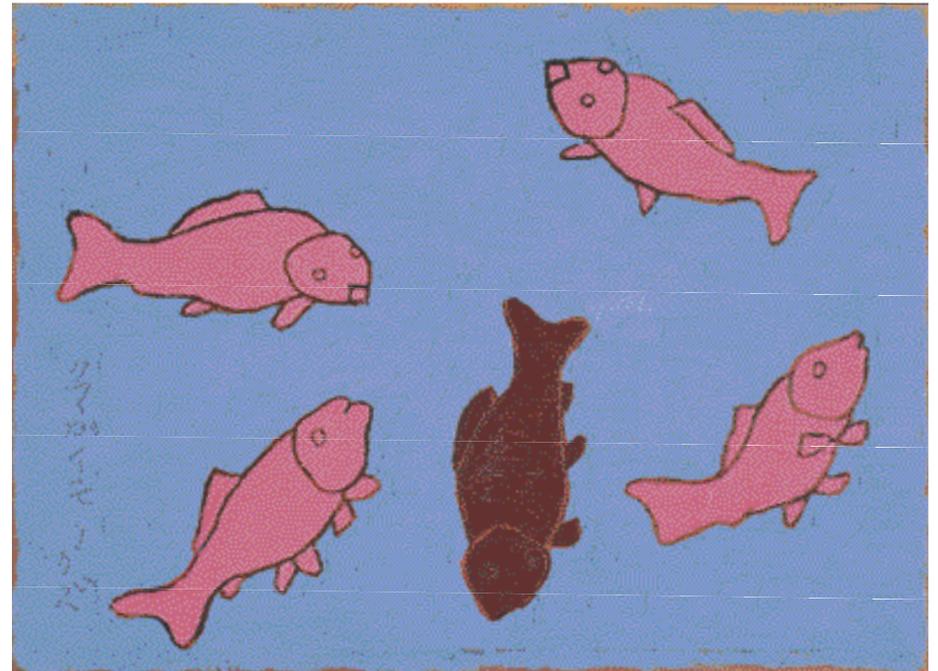
主催：東京国立近代美術館／日本経済新聞社／テレビ東京
Kumagai Morikazu: The Joy of Life The National Museum of Modern Art, Tokyo



97年、 生きた、描いた、 画家の軌跡



1. 《猫》 1965年 / 愛知県美術館 木村定三コレクション (表紙とも)
シンプルな線なのにネコの体温まで伝わってくる



ちぎよ
2. 《稚魚》 1958年 / 天童市美術館

5匹の魚がいるようにも、1匹の魚がぐるぐる泳いでいるようにも見える

花や鳥や虫、何気ない庭の一角。
明快な線と色で
身近なものを描く作品により
広く知られる熊谷守一。
しかし、一見穏やかに見える
その作品の背後には、
科学者のような観察眼と
考え抜かれた制作手法が
隠れています。
97年の人生を
ひたすらに生き、描いた、
その軌跡を存分にご紹介する、
待望の回顧展です。



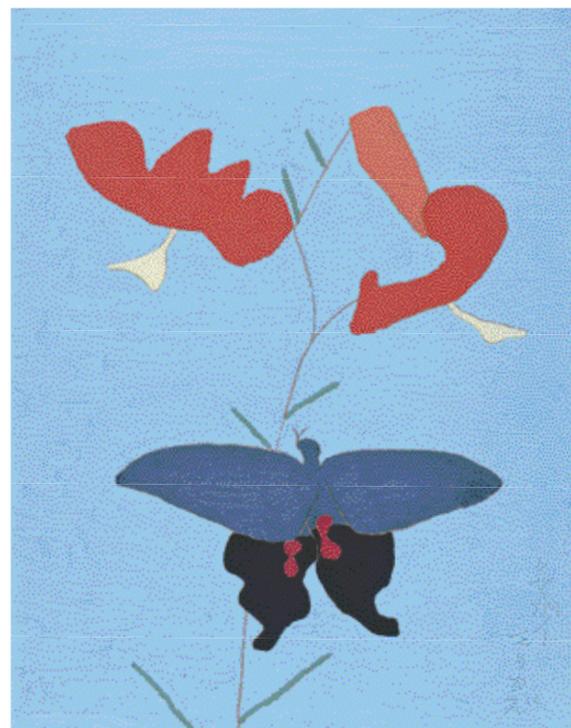
3. 《^{うてき}雨滴》1961年／愛知県美術館 木村定三コレクション
水滴を捉える高速度カメラのような目



5. 《^{ぎく}ハルシヤ菊》1954年／愛知県美術館 木村定三コレクション
花と同じかたちをしたカタツムリがこっそり隠れている



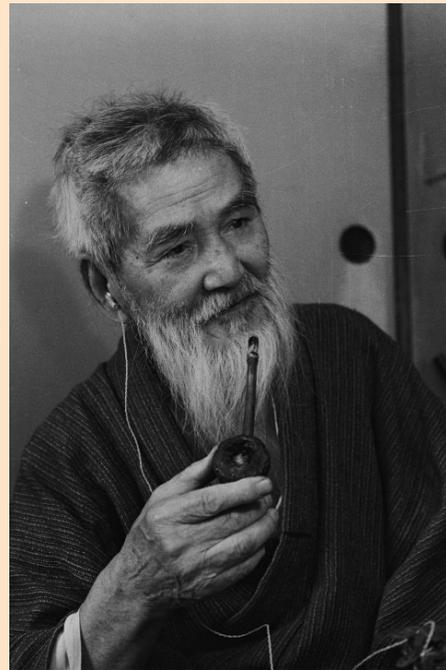
4. 《^{にちりん}朝の日輪》1955年／愛知県美術館 木村定三コレクション
朝日をじっと観察し、見えてきた色を描く



6. 《^{おにゆり あげはちょう}鬼百合に揚羽蝶》1959年／東京国立近代美術館
オニユリとアゲハチョウが同じかたちをしている不思議

“ 誰が相手にしてくれなくとも、石ころ一つとでも十分暮らせます。石ころをじっとながめているだけで、何日も何月も暮らせます*1 ”

クマガイモリカズってどんな人？



撮影：日本経済新聞社

1880(明治13)年 -1977(昭和52)年

岐阜県恵那郡付知村えなつけちに生まれる。1897(明治30)年上京。1900(明治33)年、東京美術学校西洋画科撰科に入学し、黒田清輝、藤島武二らの指導を受ける。同期に青木繁、和田三造らがいる。1904(明治37)年に同校を卒業。1909(明治42)年には《蠟燭》により第3回文展で褒状を受ける。翌年一時帰郷、1915(大正4)年に再上京するまで、材木運搬などの仕事につく。上京後は二科会を中心に発表を続け、二科技塾の講師も務める。1922(大正11)年、大江秀子と結婚。1928(昭和3)年に次男・陽を、1932(昭和7)年に三女・茜を、1947(昭和22)年に長女・萬まんを失くすなど、戦争をはさんで次々と家族の死に見舞われる。戦後は明るい色彩と単純化されたかたちを特徴とする画風を確立。97歳で没するまで制作を行った。住まいの跡地は現在二女、熊谷樞氏かやを館長とする「豊島区立熊谷守一美術館」となっている。

”

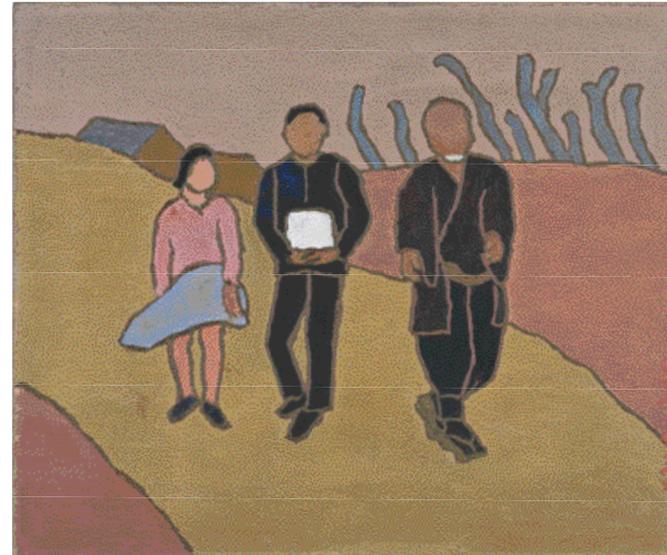
生きていたいと思いますね。わたしってしみったれですから幾つになっても命は惜しいです。命が惜しくなかつたら見事だけれど、残念だが惜しい*2

“



7. 《某夫人像》 1918年 / 豊島区立熊谷守一美術館
秀子夫人の若き日の肖像

“ 絵を描いていてどうかすると、思い違いで、何でもないと思っていたのがひどくむずかしくなったりすることがあります。そんなときは一人でベソをかくだすわ。そのベソをかくの、自分がもう一人いて見ているんです。その見ているほうのが、ベソかいているほうに「このバカヤロー」っていうんですわ。それが面白いんです*2 ”



8. 《ヤキバノカエリ》 1956年 / 岐阜県美術館
長女を亡くし、長男、二女と遺骨を抱えて帰る自身を描く



9. 《御嶽》 1954年 / 岐阜県美術館
70代で身体を悪くするまで山での写生を愛した若いころは故郷の山中で材木を扱う仕事をしたことも

”
みんなはわたしのことをすぐ仙人、仙人と呼びますが、わたしは仙人なんかじゃない、当り前の人間です*2
“

〔 展覧会の構成 〕

1880
(明治13年) 岐阜県恵那郡付知村に生まれる

1910
1920 — 1章 「画業の始まり」

1930
1940 — 2章 「さまざまな模索」

1950
1960 — 3章 「線と色の完成」

1970

1977
(昭和52年) 97歳で没する

※章のタイトルは全て仮題です

Kumagai Morikazu: The Joy of Life

1 章 画業の始まり

1900年、熊谷は東京美術学校（現・東京藝術大学）に入学し、黒田清輝らの指導を受けました。同級生に夭逝の画家、青木繁がいます。授業で人体のデッサンを学び、1920年代以降の裸婦像の基礎を作りました。また、闇の中でのものの見え方を追究するなど、早くから独自のテーマにも取り組みました。

1910年、岐阜の山中にある故郷に戻り、材木を扱う仕事をした後、再び上京。山仕事の経験は晩年に至るまで熊谷の作品や生活態度に影響を与えました。



ローソク
10. 《蠟燭》 1909年 / 岐阜県美術館

the
1910s
|
1920s

2章 さまざまな模索

the
1930s
|
1940s

この時期熊谷は、絵具を厚く塗り重ねる技法を用い、多くの裸婦像を描いています。また千葉、長野、故郷岐阜、山形など山や海に出かけ、風景画を制作しました。こうした裸婦像や風景画の中から、次第に、くっきりした輪郭線と色の面による戦後の作風がかたち作られました。また、この頃に描かれた膨大なスケッチは、戦後の作品にも繰り返し使用され、熊谷作品の土台を成すものとなりました。油彩以外に書や水墨画を手掛けるようになったのもこのころです。



11. 《人物》1927年／豊島区立熊谷守一美術館

3章 線と色の完成

the
1940s
|
1970s

戦中から戦後にかけて、くっきりした輪郭線と色を特徴とする、もっとも広く知られる画風が完成しました。76歳の時からだを壊し、以後自宅からめったに出ず、主に庭の花や虫、鳥など身近なものを描くようになります。しかしこうしたモチーフのいくつかは、すでに1940年代に描かれたスケッチの中に登場しており、長期にわたってねばり強く関心が持続する熊谷の制作の特徴がうかがえます。



12. 《^{のしもち}伸餅》1949年／愛知県美術館 木村定三コレクション

40 没
年 後

〔開催主旨〕

東京国立近代美術館と日本経済新聞社、テレビ東京は、没後40年を記念して、画家、熊谷守一（1880-1977）の回顧展を開催します。

熊谷守一は、明るい色彩と単純化されたかたちを持つ作風で知られます。晩年は花や虫や鳥など身近なものを描いたたくさんの作品を生み出しました。飄々とした味わいを持つエッセイでも知られ、『へたも絵のうち』（原著は1971年、現・平凡社ライブラリー刊）は、現在もロングセラーの文庫となって若い層にも読み継がれています。

その作品は一見ユーモラスで、何の苦もなく描かれたように思えます。しかし、若い時期から晩年までの制作を詳しくたどると、暗闇や逆光など特殊な条件下でのものの見え方を探ったり、スケッチをもとに同じ図柄を複数の作品に用いる方法をつくり上げたりと、さまざまな探究の跡が見えてきます。穏やかな作品の背後には、科学者にも似た観察眼と考え抜かれた制作手法とが隠されているのです。

この展覧会は、最新の研究成果を踏まえて行う、東京で久々の大規模な回顧展です。《雨滴》（1961年、愛知県美術館 木村定三コレクション）、《猫》（1965年、同）といった代表作をはじめ、200点以上が一堂に会します。

97年の長い人生には、作風の変化はもちろん、家族の死、自身の病などさまざまなことがありました。しかし熊谷はひたすらに生き、そして描きました。その作品世界を存分に感じ取っていただけたら幸いです。

熊谷守一

生きるよろこび

クマガイ
ニモリカ
イ

熊谷守一展 開催概要

〔会期〕 2017年12月1日（金）～2018年3月21日（水・祝）

〔会場〕 東京国立近代美術館 1階 企画展ギャラリー（東京都千代田区北の丸公園3-1）
東京メトロ東西線 竹橋駅 1b出口徒歩3分

〔休館日〕 月曜日（ただし1月8日、2月12日は開館）、年末年始（12月28日～2018年1月1日）、1月9日（火）、2月13日（火）

〔開館時間〕 10:00-17:00（金、土曜日は20:00まで、入館は閉館30分前まで）

〔観覧料〕	当日	前売	団体	ペア
一般	1,400円	1,200円	1,000円	2枚で2,000円
大学・専門学校生	900円	800円	600円	-
高校生	400円	300円	200円	-

*前売券・ペアチケットは、10月2日（月）から11月30日（木）まで販売。*団体料金は20名以上。

*中学生以下、障がい者手帳等をご提示の方とその付添者（1名）は無料。

*本展の観覧料金で入館当日に限り、同時開催の所蔵作品展「MOMATコレクション」もご覧いただけます。

〔主催〕 東京国立近代美術館
日本経済新聞社
テレビ東京

〔展覧会特設サイト〕

<http://kumagai2017.exhn.jp/>

〔一般のお問い合わせ〕

ハローダイヤル
Tel. 03-5777-8600

*講演会、ギャラリートーク等を予定しています。
詳しくは特設サイトに随時お知らせします。

〔報道関係お問い合わせ〕

「熊谷守一展」広報事務局
（ユース・プランニングセンター内）
Tel: 03-5467-8638 Fax: 03-3499-0958
Mail: kumagai2017@ypcpr.com
住所: 〒150-8551 東京都渋谷区渋谷1-3-9
ヒューリック渋谷一丁目ビル3F

MOMAT 東京国立近代美術館

